

昨年は連続した台風が日本全土に上陸したことにより各地で甚大な被害が発生し、土木学会の講演会や報告会では S56 以来の大災害という言葉が頻繁に耳にしました。自身も 9 月ごろから災害復旧関連業務のため道内を札幌や旭川、網走から帯広と立て続けに駆けまわり、本執筆も実は年末の帯広滞在中に開始しました。このような本格的な災害業務は個人的には約 10 年ぶりで、前は未熟な技術力のせいで非常に苦しめられた苦い記憶があったことから、技術者としての重大な使命を感じる一方でただならぬ恐怖も感じておりましたが、何とかピークを乗り越えることができ、年末で一区切りつけることができました。私達の成果の大部分は、残念ながらこのような場面で効果が発揮されませんが、そこには前例のないような現地の状況を眼前に再度の被害防止に対する工法の模索など、まさに真の技術応用力が要求される中で、今の土木技術がまさに先人の方々とそうした災害との戦いの積み重ねの賜物であり、今回の災害の中で得られた技術や知見もしっかりと未来へつなげなければなりません。また災害現場では複合的な要素が絡むことは常で、私は河川が専門ですが、台風による建造物の被災はほぼ河川原因となるため、どうしても橋梁や道路などといった分野の知識も必要です。自分または同世代の技術者は専門性が高い反面、他分野のことが疎くその手の話題となるとお手上げ状態となるのではないのでしょうか。そのように対応できる人間(ゼネラリスト)が減っていることも個人的には懸念しており、災害には限りませんが、全体を見渡せる技術者の必要性も改めて感じました。今年はいったい災害が起こらないことを願いたいと思います。

大島 宗 (おおしま たかし)

●建設部門

勤務先

北武コンサルタント株式会社



→次号は、中村茂志さん(農業部門)

私は子供の頃から天気に興味があり、小学生の頃は新聞の天気図をスクラップし、毎日天気と気温を記録しては自由研究で発表してました。大学では土木工学科に進みましたが、唯一気象を研究題材の 1 つとして扱う研究室に飛び込み、縁あって現在の職場に勤務することになりました。出身は茨城県土浦市、学生時代は東京に住みましたが、大学時に研究で北海道を訪れたのをきっかけに大自然広がる北海道が好きになり、第一希望で北海道に勤務することになりました。はじめは数年ほど北海道に住んでまた別な地域(当時は沖縄も希望)に住みたいと思っていたのですが、早いもので北海道在住 23 年となり、地元茨城を超えて最も在住期間が長くなりました。

川村 文芳 (かわむら ふみよし)

●建設部門

勤務先

一般財団法人
日本気象協会 北海道支社



→次号は、中野洋一さん(建設部門)

入社当時は河川・水文に関する調査解析業務に従事、5 年を過ぎた頃から農業気象調査や電力気象点検も経験、7 年目頃から道路防雪調査・設計に携わるようになり、その後は最近まで道路気象・雪氷に関する調査解析・設計および情報提供業務に従事してきました。道路防雪調査・設計に携わるようになってから技術士という資格を意識するようになり、幾度とチャレンジした結果、2013 年(平成 25 年)に建設部門(道路)の技術士を取得することができました。現在は営業グループのリーダーとして、道路管理者向けの吹雪予測など防災ソリューション事業に関する提案を行うとともに、ボランティア活動としてウインターライフ推進協議会に参画して、札幌市内の歩道の滑りやすさを予報する「つるつる予報」の提供に携わり、歩行者の雪道による転倒事故防止に取り組んでいます。今後も利用者に役立つ気象情報を提案できるよう精進していく所存です。